



安政戊午孟春新鐫

柳菴栗原氏校訂

重修
真書
太閤記四編

東都書肆 知新堂發兌



門外
號 459
卷 31

序
天地設位萬國森列本邦
屹立於東洋中地美俗正
自上古聖神開基
百王一姓大統之盛與天
地無窮實為西間第一之
邦矣上有聖人則下



有賢者是以自古俊傑英
雄林、輩出管家之文學
源氏之智勇平內府之孝
楠河州之忠昭曜宇宙千
載不朽若夫才包山嶽氣
蓋萬夫掃穢濁而清六合
功曜本朝威震海外者其

唯豐太閤子應仁以來天
下大亂群雄割據視鴟
張迭相吞噬無有寧歲太
閤起身微賤慨然欲澄清
天下於是屬熊羆之士率
智勇之將指麾則風雲生
叱咤則雷電興兵勳而神

驚謀成而鬼哭誅光秀斬
勝家降義久臬氏改叛逆
者盡誅鋤暴亂者盡蕩滌
八歲之間六十餘國大定
以翼 王室令諸侯使
天下復歸于統壹餘威所
及蹂躪朝鮮摧破明軍易

於拉朽其雄才大略雖漢
高亦當北面斂社豈非不
世之英雄也耶太閤之英
雄如共而二世而止者何
哉古聖人之於天下取之
以仁義守之以仁義故萬
姓悅服傳世長久至後世

或有以智量取天下而守
之不以仁義故其止也忽
諸太閤攻取戰克料敵如
神億萬之衆四海之大容
諸胸中曾不蕪芥其智其
量與江海爭大而太閤撫
民以仁乎非也為事皆出

乎義乎非也言語不必信
刑罰不必中親不必賢
臣所遠不必小人驕奢怠
忽極天下之欲蓋太閤取
天下之才有餘而守天下
之德不足也况嗣子童昏
驕婦姦豎用事興無名之

師失豪傑之心其二世而
士不亦宜乎雖然天下之
定出乎太閤之智力天下
之亂在於太閤之沒後太
閤不出天下不定太閤不
沒天下不亂一人之身而
天下之治亂係焉豈武田

上秋毛利北條氏等之所
能及哉且起人奴取天下
官至太政大臣前人之所
無也欲電掃明國使其四
百州盡化我俗亦前人之
所無也吾故以為不世之
英雄豈非然哉此書記太

閣事甚詳續者宜當學其
善者而戒其不善者苟學
太閤智量之大志氣之壯
則上者足以輔帝王
治四海而服夷狄下者亦
足以為豪傑之士而盡忠
于國家若是則真神州之

人也真聖人之成也
嗚呼此書亦可謂有益于
世之書矣
安政五年歲次戊午春二
月木村溫士良撰



木村溫士良



重修真書太閤記四編總目録

卷之一

濱松御勢横山表御著陣の事

并 浅井長政朝倉義景へ出陣を請事

浅井長政軍評定の事

并 遠藤喜右衛門必死を期する事

卷之二

信長出勢手分の事

并 浅井朝倉姊川出陣の事

江北姊川合戦の事

并朝倉勢敗軍真柄父子討死の事

卷之三

礪野丹波守五段の備を破る事

并木下藤吉郎備を設く敵を待事

木下藤吉郎礪野丹波守を敗る事

并浅井長政二たび合戦の事

卷之四

木下礪野二度合戦の事

并木村又藏高名の事

浅井方總敗軍の事

并遠藤喜右衛門討死の事

卷之五

安養寺三郎左衛門尉誠忠の事

并木下藤吉郎小谷發向を進むる事

秀吉横山城責を望む事

并横山城兵降参退去の事

卷之六

三好黨野田福島不出張の事

并浅井朝倉坂本へ出陣の事

宇佐山城合戦の事

并織田九郎信治森可成戦死の事

卷之七

織田殿淺井朝倉と對陣の事

并山門の衆徒淺井朝倉を馳走せる事

勢州江劔一揆蜂起の事

并秀吉佐々木承禎を服せしむる事

卷之八

佐々木承禎織田殿と和睦の事

并堅田合戦坂井政尚の事

坂井右近勇戦の事

并松平勘四郎信一武勇の事

卷之九

織田殿軍評定の事

并木下藤吉郎退軍を勧る事

織田殿宇佐山退陣の事

并淺井朝倉織田勢を追事

卷之十

木下藤吉郎室町殿へ參上の事

并宜旨を重んぶ三家和睦の事

卷之十一

神戸藏人具盛隱居の事

并丹羽長秀礪野降參を執成事

木下藤吉郎遠慮の事

并淺井家諸士追々降參の事

卷之十二

浅井長政横山へ使者を遣は事

并秀吉鎌の刃城後援の事

信長長島へ出馬の事

并多藝口引取柴田難戦の事

卷之十三

氏家入道ト全討死の事

并信長江北御出馬の事

佐久間明智等諫言の事

并信長山門を焼拂ふ事

卷之十四

信長江州より歸陣の事

并秀吉宮部善祥坊を語らふ事

浅井勢横山城攻敗北の事

并宮部善祥坊織田家小屬たる事

卷之十五

浅井長政伊黒の城を責る事

并日根野兄弟智勇の事

秀吉竹中と密談の事

并竹中日根野兄弟を激は事

卷之十六

日根野兄弟相談の事

并信長信忠江北働の事

朝倉義景大嶽小出張の事

并柴田木下淺井朝倉と合戦の事

卷之十七

齋藤龍興前波乃妾小戀慕の事

并前波吉繼齋藤龍興を討んと謀る事

義景前波を誅せんと謀る事

并前波畠田等織田家へ降参の事

卷之十八

虎御前山砦普請の事

并山崎長門守計策の事

木下藤吉郎虎御前山の城を守る事

并淺井朝倉城攻敗軍の事

卷之十九

淺井長政宮部山の城を攻る事

并木下藤吉郎後誥の事

將軍義昭卿信長を滅さんと謀る事

并信長疎意ふき旨陳謝の事

卷之二十

石山堅田合戦の事

并光秀奇計堅田城を乘取事

長岡荒木等降参の事

并將軍家信長和睦の事

卷之廿一

三洲大和守諫言の事

并將軍義昭卿旗の島御動座の事

二条御所合戦三洲大和守討死の事

并秀吉梶川に密謀を授る事

卷之廿二

梶川彌三郎將軍退去を勸奉る事

并將軍家楨嶋退去の事

信長江州所々働の事

并木下細川淀の城責の事

卷之廿三

加藤清正岩成主税助を虜る事

并秀吉勸誅祐道事

荒木村重高槻城責の事

并中川瀨兵衛和田惟政を討事

卷之廿四

安養寺三郎左衛門尉古郷に閑居の事

并秀吉再度日根野兄弟を謀る事

浅井七郎日根野不討る事

并日根野兄弟虎御前山不入事

卷之廿五

信長父子江址出張の事

并 朝倉義景柳ヶ瀬着陣の事

前波九郎兵衛尉浅見對馬守を説事

并 大岳町野落城の事

卷之廿六

義景田神山對陣の事

并 佐久間右衛門尉信盛荒言の事

刀根坂合戦の事

并 山崎長門守父子戦死の事

卷之廿七

齋藤龍興主從討死の事

并 日根野兄弟愁歎の事

朝倉義景最期の事

并 秀吉越前仕置を言上の事

卷之廿八

浅井下野守久政自害の事

并 信長より城中へ使者の事

備前守長政最期の事

并 浅井家士勇戦の事

卷之廿九

秀吉京極家の息女懸想の事

并 高次高知出身乃事

黒田官兵衛尉江州逗留の事

并三好左京大夫義繼滅亡の事

卷之三十

富田彌六郎長秀謀叛の事

并明智光秀敵を欺く事

越前國一揆蜂起の事

并富田彌六郎長秀戦死の事

重修真書太閤記四編卷之一

濱松御勢横山表御着陣の事

并浅井長政朝倉義景一出陣と請ふ事

去程に織田家の軍勢小谷表と引拂ひ横山の城と

責んとせし處一浅井長政の下知として浅見大學

浅井玄蕃打て出喫留んとあしけしと佐中茶筌

田乃三人後殿して三田村に於て合戦數刻及ひ

雙方死亡手負餘多ありしは浅井勢も戦ひ疲ま

て退散しけしふり織田方も難ふく彼表と引取

しは大事の退口神妙ありとて佐中茶筌田の面

ニ御感又預りけり然してのち信長龍ヶ鼻に本陣
と居らまほその夜の諸勢を休息させ翌廿三日惣軍
と以て横山の城を責らまほ三萬餘人入替
く攻めかぞと當城ハ淺井家股肱の幕下三田村左
衛門尉大野木土佐守野村肥後守と大將とて歴
この勇士と多く籠らまほの上に玉薬以下之ハ
らず貯一置つまハ寄手の大軍とちとも恐まほ三
人の大將分とめく持口とを固りてよく防戦あり
けりれり織田家の軍勢劣るまほにあらぬども
極暑の時よてはあり流る汗甲冑とめく力疲
て氣緩るまほと急小堀に乘こもめあまほ

ほりく虎口と引退て休息をめく處よめくの約
束と違へらまほ濱松より出陣ありしけり
御供ハ酒井左衛門尉忠次大又保七郎右衛門尉
忠世小笠原與八郎長忠本多豊後守廣孝同平八郎
忠勝内藤三左衛門尉信成神原小平太康政石川伯
耆守數正等と先とて五千餘人元龜元年六月廿
三日小谷の前杉坂とりの處まで着御ありし本
多平八郎忠勝内藤三左衛門尉信成と斥候とて
遣らまほ敵の形勢地形の利害と見定させり翌
廿四日龍ヶ鼻の御陣一参向ありし時信長は
炎熱の苦と堪り給まほ甲冑と脱白き帷子に陣羽

織と着し黒き笠とりし床几と腰りけ諸軍と下
知してあし海に濱松より御参ありけり
信長御笠と脱ぎせりし式代ありあの極暑の時
節遠路の参陣祝着にゆと慇懃と御挨拶ありけり
は濱松までも遅参の茶畏入由御口状ありて暫く
御談話ありけり御座の設ありしより信長
の傍に御膝と屈して御座ありけり木下藤吉郎
見あげ奉り敷皮一枚携来りし敷御安座あり
せりし由言上せり濱松までも殊の外御
悦喜乃体ありてまた御丁寧に御答禮ありてのち御
着ありしあり

是年三月七日織田信長御加勢として濱松御發
駕四月廿日信長と共に越前へ入御廿五日手筒
山城責廿六日金崎の城責廿七日浅井長政信長
に叛くは信長金崎の圍を解く京へ引返し
ありし時御自身鉄炮を打せらきて敵を拒りせり
い五月十八日岡寄に還御ありしより濱
松へ入御六月廿三日小谷表着御ありしは
濱松より御座と三十余日に過さるる流布本
此次に濱松の老臣敷皮の禮の厚きと悦び信
長ののち敷皮を設けしと怒り時に信長
の座を設けしとハ御着の日次と兼て告る

はらまで彼陣中蒼卒のこゝろの答ひに足は
と仰出さき木下藤吉郎ハ信長の家臣とつて
智謀といひ武功といひ名譽の侍あり行末たの
まきそのあり中々企及びめたし賢者と敬
むを誰う輕薄といふん誰う諂諛といふん其方
々々今より十餘年のうちに思ひ合はるるあ
べーと仰らまはしとりやきてあま水下陣中
てハ舎弟小市郎秀長とほげり淺野彌兵衛杉原
七郎兵衛あ同一中けりハ今日本陣まで濱
松の敷皮を取て座と進りらまはしとあまりとや
輕忽とやべー昔ハ織田家の小臣まはしおまはし

り今ハ一城の主として一方の大將と承はりせ
あま御身あり如何に召仕いも人に事りま
あまを自身に立せまあまを去は便宜又叶はす
何といひ御心まであまのいごやといひば秀
吉さあといひを濱松を若くおまはし海道を
第一の弓矢取に御座は海道第一とやせは恐ら
くハ日本一とてあまのいごや此殿の六十も
あらせあといひやまハ秀吉あんども膝を屈りて
送迎一奉まづきあり見らやま又汝等何まも此
殿の門下は伺候せん遠くらすと語りしと
今に龍ヶ鼻又織田殿本陣松といひ松揃あり即

信長の旗と立もの地と云傳ふその邊の土人
口碑にこの敷皮のこをつつみ因て流布本も

記ヤ〜あ〜

信長江州に入て淺井方の諸城を落し大に軍威を
震つ小谷の町屋と放火濫坊しその勢大形あ
まを拂めて見えける處一遠方より約定をたぐ
まりに參陣あし備すと當手勝軍の瑞相あま
と信長ことの外悦喜あしむ此競と脱き横山
の城を攻拔んと夜晝三日の間息とも續せず攻た
りしものも要害よく勇士必死小あうと籠りし
ばたやもく落城もくも見えざりけり然共城中

防禦又勞ま苦む尋常あらず長く籠城叶ある
らばと三人の大將達相談して小谷一加勢を乞
やく後詰あま若延引及び城を開くの外
に術計あし注進せしは淺井備前守長政并に
下野守久政何様加勢と差遣は三田村大野水野
村と援のいあま〜と小谷折あ
無勢りて後詰に充つき軍兵あし越前勢近々出陣
ま〜けまバその勢を以て横山表の後巻せし
べ〜として重ねて越前一脚力を走らせ義景の出馬
を促しけまに織田方には遠州より荒手加まぬ
との風聞頗あまは淺井のあ〜氣臆まして只越前

の加勢と望むと大早に雲霓と待ぐぐぐとあり
けた然も信長越前より義景出馬したらんよ
ハ勢ハ定めて雲霞のうらうらとあり
其勢より後
巻あらは味方却て難義ありとて後詰と防ぐ
手當と好しまた城責とも嚴重にあしあけきを
楚忽にうきを欺くべき手立もあく城中日こ退
屈しけしゆより小谷までハ長政うきを聞くと遠藤
喜右衛門が度こせしそのを用いざりけしとあり
口惜さよと後悔もさよともその甲斐もあく且下野
守久政心中はわその當りりるるげきと今
更らぬ体よて居るの結句喜右衛門尉と宥りら

るあも及を以て遠藤ハ如何ある奇謀有て其ウヤ
勸むとてを用いぬやと案に暮しつ
時うそ忠臣は討死すられれと心よりあはしく思ひ入
て居たりけり知人のあきこをうたせけき
浅井長政軍評定の事
并遠藤喜右衛門尉必死と期せし事
越前より浅井備前守長政より度この脚力とて
けく信長江州へ乱入し小谷表と放火濫妨し只今
横山の城と責落さんと信長本陣と龍ヶ鼻に居ら
まし一處一遠州より加勢到着せし昔落あく聞え
か共義景元來遲緩性質あし脚力と以て中越る

趣具は承知せり早に出馬せしむる由返事
 づうもハたしめられども出馬の用意も及ぶ
 りに魚任備中守大よあせりたて浅井備前
 守殿ハ先代の義理と頼む親しき縁と絶て信
 長と弓箭に及ぶと全く當方一味の故あり然ばた
 とい中越る意趣あく共御出馬ありて御加勢ふ
 さ多なき筈あり然るといもんや度々使者と請ふ
 まあがり御出馬あきハ何事ぞや弓箭取の意地と
 弛一武勇の家の瑕瑾あり御馬とは出さうと
 御先手とい早と遣はさるづきとほしく浅
 井殿父子の御心中と推量りに耻入る聞が如く

信長三萬の勢とて然も遠州より荒手乃加勢
 到着のよりに少くは横山の城とバ忽に責落し
 一横山落城仕りゆは直に小谷へ取掛かあら
 ん左は浅井殿父子定めて難義ありあつて
 兩家累代の御誓約ハ御互に御援ひあらんとの義
 あゆむや浅井殿父子は當方一の義理より
 夫婦の間と避あまあらざるや此節御人數は
 ても發向あは永く武士の道と失ひはんと
 何ぞ残り残念にゆめ唇盡く齒寒しと中よりの
 一は浅井殿滅亡あらばその歸り足に信長越前へ
 取掛かざるべし然らば浅井殿と見繼あつて全く

當方の爲と思召ゆべしと或は怒り或は理とせり
 て諫めつ勵まらるるあけきは義景をうく納得し
 然ば出馬まじりと下知せられ魚住にハ先鋒加
 ほうく發向まじき由と定めらるる魚住備中
 守ハその用意とありてけり魚住のほごに諫めし
 めごと義景のあふともや出馬の催もあく緩く
 として居たりける處に淺井より早馬と立ち中越
 けは織田家三萬餘人遠州勢五千餘人横山の城
 と取圍んで攻まると急あり御加勢遅くは其競ハ大
 城遠のゆるゆる横山落城仕りハ御出馬と中請
 勢直小谷に發向ゆべし依る度御出馬と中請

とつと今に御旗とも出さばは兼約の意
 趣その頼あきに似たり彌御出馬延引に及ぶは
 力あり長政久政父子一手と以て存亡と一戦の中
 に極の恨と泉下に報ずるまじきと兼て取交
 せ誓紙と返しけしバ義景始て油断せし朝倉
 後悔しあつ手合のためはとて一族ありける朝倉
 孫三郎景健と大將と一萬餘人と差越たりし
 大寄山の上下に透間あきまて陣取けり
 孫三郎景健ハ彈正左衛門尉教景の二男孫三郎
 秀景の孫あり

浅井方にて越前勢の大寄山まで出張せしと見
て少しは色と直せり越前勢ハ義景やうて出馬
あさべけまハ是と待つけり何方へありとを
駈向ふべしとわさひ山上に篝と焼て威勢ばり
と示して居たりけり信長方にて是と見付すはや
浅井一朝倉の加勢出張せし件の勢のいまだ手
配と定めぬらちに横山と責落し越前勢ハ鼻あ
せよとのふれどころあ終三萬餘騎短兵急責つ
て共大野木三田村野村のつぎも究竟の勇士
て少も弱き色と見せば防戦し小谷一注進擲の齒
と引しは長政は此上は義景と待に及び手

勢ばりとも一戦と挑む有無の勝負とあま
きに朝倉孫三郎加勢と出陣あまバ義景やと
よはあけきとも又嫌ふら道もあしとて廿七日
の夜深て長政朝倉孫三郎景健に面會あし合戦の
方便と談合ありけり越前衆の陣取し大寄山
は信長の本陣龍ヶ鼻まで道程五十町あり直に押
かしては人馬と力疲きて氣衰ふけしは明
曉野村三田村一陣替ありと一息つき廿八日の晨
朝に信長の本陣一不意に切掛り急に是と責は敵
ハ思ひあらずして周章すべし味方ハ十分の勝利
と得べきありとゆけり浅井半助とて武勇人に

許さししものあがり先年久政の勘當とつけて小
谷と追出さし濃州に立越稲葉伊豫守に所縁あり
と以て暫時うまはまて居たり信長の軍
立と能く見知りありけり今度織田浅井予盾に
及ぶ浅井と見續ず彌不忠不義の名と蒙る
しとわし稲葉にも暇をもせぬのよ小谷一
歸り赤尾美作守中島日向守に就く勘當免許あり
んことを願ひしに久政きつた殊に稲葉う家にく
まはまししものあまきバいひく疑心あまきよあらはと
て用ひらまじりしゆ兩人様々に證據と取く詫
言中せしゆ久政も黙止しゆとく然らむとて免

許ありて差置きけり此間信長陣替の時丁野若
狭守と共に討て出合戦織田勢あまた討捕し
ども却て丁野も半助も久政のあくと受あらし
遠藤喜右衛門が能取ありけり依て久政も漸思
返り此頃は傍近く出勤しけり今日評定の
席つと差加えられたり然るに長政の軍慮と承は
り御存の如く其ハ三ヶ年濃州に罷在り信長の所
置と見覺てゆが心のはやきと猿猴の梢と傳ふ如
き振舞にゆつと三田村まで御陣替あらむ必す
手當と仕りゆつと若相掛りに軍あまき味方難
渋仕りゆらん今暫時敵の様と御覽ありと可然

かち中けしに長政宣ノ様横山乃城の軍急あまは
そのまよ見合がし敵の出来ると恐まては勿く
軍ハあまよその上延こせ横山終に攻落
に於ては戦と始むるの外思案に及ぼすとあけ
るを聞て遠藤喜右衛門然るく覺れ兎角も内
に横山の城中の者も後援あきと恨を降参して敵
一加はるまどきにもあらは信長當方一打入よ
早く御陣替然るく思召の如く替あせそ廿九
日敵陣一無二無三に切入まると味方の勝利

疑ひ有るる假令は敵方にて此方の色と察し出
向はるその處りて合戦とぞ何のこほまきとぞ
喜右衛門に於ては必定信長と撃捕り討死仕ふ
二の道と出ゆまじと思ひ定め早く御出陣可然とす
久政も此を遠藤が中と一度も用はず宜敷
と無るる此度ばかり喜右衛門尉が昔も同心ありて
然ハ朝倉殿は織田と遠州勢と二手の内何方に向せあ
づまめとせし孫三郎何まきも共罷向ひ可やとあ
つめ長政りやく其當の敵ハ信長に依て其信長に向
ひて朝倉殿ハ遠州勢と防ぎまほつと定りて陣
替の支度と急ぐれけ遠藤喜右衛門尉ハ兼て軍のあら

大問記四編卷之二
人時敵陣一紛多入信長と窺ひ撃んと思ひ一かけ朋輩の
勇士に談ひ合せける、面々明日の軍に打込の軍せんと思ふ
べからず偏に敵陣一忍び入んと心掛べし然らば敵陣
一忍び入冥加有て信長と刺得るも敵陣と遁を歸らん
とハ難うべし然は今宵限の祭會之又此世の名残と酒
宴しそけり、諸士ハ偏に老武者が壯士と勵まは爲のくそ
言とのと思ひて何も遠藤殿の仰らるる道とあり我くも
明日の軍に討死して榮名と後世に傳ふべきと答へ
し、勿は喜右衛門も悦び左様とこそ誠と忠臣の道お
まはや曉も程近一面々用意にかけらせむとて思ひ
よ別まけり
重修真書太問記四編卷之一終

重修真書太問記四編卷之二

信長出勢手分の事

并淺井朝倉姉川出陣の事
龍ヶ鼻の本陣おてハ朝倉勢敵方小加と信
長慥に見届むハ彌急に横山城と攻ませむハ城中
もてハ朝倉勢既に大寄山ハ陣と取一容子と見た
まハ後詰乃勢近づきたり此方少くも随分と力を
盡し氣と勵ましと防戦とと互に勇り勇りら
まてハ面々の役所と守りけり然るに元龜元年六
月廿七日の夜亥刻ばうそに木下藤吉郎秀吉敵陣

の体と伺ひ頃て信長の本陣へ参上しけり信長
 の終日の指揮に疲れし帷幕の中へ入休息し
 て在けり秀吉参上と聞召何事あらんと驚き思
 召急ぎ御對面ありて夜深に伺候の奈心元ありと
 仰られけり左へ越前勢到着仕りし一は定りて
 横山の後援して急に合戦ありべきに今日まど何
 乃色も見えぬは定りて義景の出馬と待りる
 一義景ハ緩こたりたる性質にて勿く神速の事
 あり大火と焚ゆハ兵糧の支度と見えぬ左とれハ
 明朝淺井朝倉大寄山の陣とらひ此方に打つ

らんと企するべし早く御勢と出さむ半途に於
 て合戦と挑まむは敵の見積り相違して定り
 て狼狽仕ゆ一然バ味方勝利疑るは只今より
 打立せむ然るべく奉存と言上しけりあり
 信長大小悦むを敵の掛り來ると半途に迎て
 戦ひんこと何れも必勝の機に當り去ハ手分と
 ありしとて諸侍大將と悉く召集り夫は又備と
 定められけり時濱松の御勢をぐりふ三千人信長
 と援けん馳來らせむに軍既に明日と聞え
 たり濱松の仰小明日の軍の御定あり今宵参り合
 せしとて幸あき何れの方よりも強りらん方一

向させしと仰らせしは信長さまは軍の期近
づきゆにこそ手配り既し定り訖ぬ但けく御
志あるは明日の戦に味方の弱き方を御勢しと助
らるべしと有しと某の言はだ二十以下も
は免ても角ても仰れ従ひし今齡既に三十
に近し遠く陣頭に馳参り打込の軍せんと長き引
矢の瑕瑾あり所望御許容ありらんを今夜引返
ししと仰らせしに信長さまを嬉しげに
打笑ひ然る北國勢に向させしと但誰と
御勢よ加えしと仰らせし時若き頃
小勢との遣ひ馴ては一大勢と下知せんこと

合期しと仰らせし心を知ぬ人と相具せんこと
六敷の朝倉何萬騎はともいへしとありけしと信
長さまに仰らせし仰はさきことありし信長が勢一人お
そそと召具しをば信長さま天下の嘲と免
しと仰らせし信長が勢と頼ませしと
少く打具しと仰らせし此上の御情とを存せし
けしと宣へばさらば稲葉伊豫守と添させしと
御所望ありしと仰らせし其手勢と
に千人に足ばい争で仰れ従ひしと辭し奉
りけしと貞通も似合ぬとと申すのりありと笑
えせしと貞通一應ハヤてはと此多乃御勢

の中より稲葉と名ぞして望ませよふと弓矢取
の面目何ぞの是に過ればき貞通今年五十五歳と
そ少罷りてゆへ鎗を取てハ若き人になれと
うと覺えゆつと云つと十文字の鎗と
打振朝倉勢何十萬とゆへ一突は突くづりゆへ
と云て犬は笑へハ陣中とゆきまたるやで響き
合とて儲信長今日ハ自身淺井に向りせよ
とて一番坂井右近將監政尚二千人二番池田勝三
郎信輝二千人三番蜂屋兵庫頭頼隆二千人四番佐
久間右衛門尉信盛二千人五番森三左衛門尉可成
二千人その外信長の旗本前後左右七段に備へら

是第一の先備木下藤吉郎三千人次左ハ安藤伊賀
守右ハ氏家常陸入道ト全真中に信長旗本次の左
ハ明智十兵衛尉光秀右ハ前田又左衛門尉利家さ
て後陣ハ菅谷九右衛門尉川尻与兵衛尉福富平左
衛門尉等あり横山の城の押へと織田上野介信
包丹羽五郎左衛門尉長秀不破丸毛等とさ置
一書に先陣坂井右近將監二番池田勝三郎三番
木下藤吉郎四番柴田修理亮五番中条將監築田
出羽守惣トて本陣までハ十三段あり横山の押
にハ氏家常陸入道ト全伊賀伊賀守丹羽五郎左
衛門尉とりハ本書と聊相違あり

諸方の手分定まりしは、はばや曉近くありしに、
坂井右近が手うり段に押し西をきりて馳り
しけり。浅井方もハ斯くくくハ夢あとしりて宵に
り用意して時刻を待あけや横雲の白くと明ゆけ
ハ浅井備前守長政八千餘人、朝倉孫三郎景健、越前
勢一萬餘人と召具し、大寄山の陣と拂ひ野村三田
村と志して押し出に浅井下野守久政ハ小谷の留
主と守り三千餘人をして籠城に浅井の先手佐和山
乃城主磯野丹波守大勇猛の剛將をして然も軍に馴
た古兵あきバ遠く斥候を出しそ伺せしに
織田方既に味方陣替の色とさりし彼方より出勢

は、体ありと告たりしは、左もあき居るあり
とて少も動ぜし進む處よりや織田方の先手の兵
士馳りて鉄炮を打ちけ戦とむ。浅井朝倉の兵
士按に相違し驚まけり。如斯くともありしに
りて遠藤喜右衛門が勸まりりて用意急り。於
て先手の兵士と颯と引退りて朝倉ハ三田
村、浅井ハ野村に扣え備を立り浅井ハ夜前より
定の置たる事なきバ信長衆と先陣後陣の際に狭
く有無の勝負と決まべしと先陣は磯野丹波守
秀昌、高宮三河守大野木大和守赤田信濃守蓮臺寺
等と相添く一千五百余騎。その次に朝倉勢五千余

大隈言の終末

人後陣ハ備前守長政乃旗本三千余騎と真丸に備
えとてよむむべしとの定りあり織田方よても是と
信長前後段こよ備と立野村の所へ押行バ
濱松乃御勢三千余人三田村表に折一寄姉川を向
いよ陣と取りよ越前勢これを見よ是ハ余りに無
勢あり何程のこころり浅井勢もこころり口惜や
や合戦とけり浅井勢もこころり口惜や
越前勢小とこころり磯野丹波守が手の
者と織田家の先陣坂井右近が勢とこころり合せ鉄
炮を打ちけ烟の下より鎗を取て駈出今日との
互に耻ある侍ども追つ返つ軍と勧りて戦ふ

たり

姉川ハ江州浅井郡長濱乃北三屋村曾根村の北
よりあり水源ハ伊吹山より發し西流し伊香郡の
諸水と合し湖又入但古戰場ハ曾根村より東に
しと川上あり
江北姉川合戦乃事
并朝倉勢敗軍真柄父子討死の事
織田濱松浅井朝倉四家の軍兵三田村野村に向ひ
姉川を隔て陣とけり勝負と只一舉に決せん
挑む戦ひけり中よ濱松の御勢をてに朝倉勢に
駈向しよあ姉川を越つ越えつ互に名と惜しむ

大隈言の終末

六

義と重んじ勇と振しく戦ひける濱松の御勢ハ元
 來野合平場の軍に調練ありあひしは朝倉勢の
 のり口と御覽せられ此敵と尋常の如くに軍せば
 味方ハ小勢あり終よそと立ちまじり戦ふべき様
 こゝとあまきとて御勢と三手に分ませられ川
 り西に引さげ備と立させらるる正面ハ御旗本
 左ハ本多平八郎忠勝内藤三左衛門尉信成大久保
 七郎右衛門尉忠世等と先とて千餘人右ハ小笠
 原與八郎長忠酒井左衛門尉忠次榊原小平太康政
 等あり先陣は松井左近大夫忠次本多豊後守廣高
 あり

一書に濱松の御本陣ハ姉川の川上國友村に葵
 の御紋の御旗と翻さる御先手の酒井左衛門尉
 忠次此手に從ふ百は櫻井の與一郎忠正福釜
 の三郎次郎親次深溝の又八郎伊忠竹谷の与次
 郎清宗形原の又七郎家忠長澤の源七郎康忠鶴
 殿の八郎三郎康定の陣代牧野右馬允康成二連
 木の松平丹波守康長野田の菅沼新八郎定盈設
 樂の甚三郎貞通西郷孫九郎家貞奥平美作守貞
 能水野惣兵衛忠重等あり其次ハ高天神の小笠
 原與八郎長忠及び一族衆との次に大須賀五郎
 左衛門尉康高松井左近大夫忠次三陣ハ石川伯

まを作りて羣り來り敵兵を待受突立まば朝倉勢
 隊伍と乱しとて勢あり勝るべく敵と侮
 烈に處あまば大返しに返されたる濱松の御勢の
 暫時又手負死人數と一らば後陣にあり孫三郎
 此體とて少し引退くやと見つけ處と左の
 方より本多平八郎内藤三左衛門大久保七郎右衛
 門右の方より小笠原与八郎酒井左衛門尉神原小
 平太透まをあらせ進み出横鎗を入無二また無
 三に突立まば右往左往と散乱し打つその數と
 一らば或ハ早く退んとて姉川の深き一追込られ

水に溺れ死する輩をありあははらまはるに周章
 て自身が太刀又躬と傷あもり大將孫三郎を乱
 軍に取巻既に危あけけと朝倉家にて名よ
 聞えと依真柄十郎左衛門尉直隆といふもの北國
 無双の大力とて萬夫不當の勇士あまが義景のた
 るに股肱耳目羽翼の輩と頼まれし郎黨あり今度
 義景出陣遅滞し孫三郎陣代として出勢ありと聞
 何時如何ある軍のありはとまきもゆり孫三郎
 若武者とて危あき戦とありまきハ味方敗北の基
 形の後見くたぐ真柄罷り向ひ然るを以て義景
 一らば添らば一處あまは今日の軍の始末真柄一人

の耻辱ありとおぼしひ込五尺三寸ありけり長刀の
 ごとき大太刀を振て弓手馬手のたふと幸難し
 切伏堅きま横さよ十文字に駈通りむらゝの
 塙の真向鎧乃袖微塵よあまやと切てまはさ鬼
 神と欺く濱松の御勢も十郎左衛門尉一人よ切立
 られ中と開て通しつは真柄嘲笑て孫三郎と伴
 ひ多くの敵と切破り姉川と渡して敗軍と集切
 にやらく千餘人ばのりよ打らさまたりさき共
 むらどあてに味方多く討きしとハおぼしめぬもの
 とと思ひし急度後と見歸るに猶姉川の向ふ
 に戦ふて引取りのし体あまは然バ助けを得るに

べしと十郎左衛門尉あたくは川と押さる朝
 倉勢ハ大勢あれども崩立たる敗軍しして大將
 まで落去り濱松の御勢は小勢あまを勝
 たり勇士のしめて然も大將軍の進退自由と得る
 へはつぎまも能首取て勇進む朝倉方あては
 黒坂備中守諸勢と勵まし備と立直さんといり
 くにあり各ころまに氣を得て前波新八郎おめ
 く馬と乗廻し敵と討て味方と援け踏越く戦一
 バ濱松の御勢も々に切立らる見えし處に遠
 州高天神の城主小笠原与八郎長忠他國の御陣よ
 供奉せしは今度けりての事といひ目と驚まや

その軍をせよと心は掛て居たりけるが黒坂を討
たんとおぼしき馬を飛し槍を打振て馳合たり小笠
原の槍ハ十文字のまが長くまけるが黒坂ハ十文
字に滅しせらまわると見ける處に小笠原大太
かを引拔備中守の兜の真向と志たしに撃つこ
きと黒坂目くらみきあがし鞍又ころりけり
二の太刀をて馬より下一切て落せば小笠原郎
等より寄り寄て首と取黒坂ももて朝倉勢いやく
狼狽さきぎけし前波新八郎同新太郎魚住次郎
左衛門踏止り爰と専途と戦つても味方志きまに
亂立既討つて見え一處一真柄十郎左衛門

尉おあしく長男十郎三郎直基獅子の荒し
大太刀と打扇し喚き叫んで走り來り切廻しは寄
手もむらと崩立左右へ開きけり真柄父子に
越前勢虎口と遁して退きたり濱松勢のうらり
句坂式部同五郎次郎同六郎五郎兄弟三人郎等お
りける山田宗六主従四人まで真柄に向ふ真柄是
とて數多の中より只四人我れ向りんと馳來り
志のめまゆけき去來參りしりあしりまやく
四人と左右に引請六七合戦しりしりあしり山
田宗六只一刀に切落され五郎次郎六郎五郎も扣

大月己日編六一

二

と立ちられ今ハ式部一人命限りに打めんと争て
り真柄に敵はらき旬坂既に危あくく一々時木多
平八郎忠勝馬と躍らせ馳來り一丈餘りの鉄の棒
と以て真柄に撃つる三十餘合を戦あたり北國
一と聞えと依大力の勇士と東國無双の名を得
壯士と互に術と盡して戦へバ勝劣更に見え分
さきまどと真柄ハ五十はりあま老兵といひ今朝
り數度の軍に疲まはる氣後れ腕あまを請太刀
あのみとくたたり木多ハのまど廿餘歳あまに荒手
のくくあまは真柄あいらいり今ハ只一撃に撃
ころまどなると忠勝心よおと様真柄や

どの武士と棒を撃殺さんくくと無念あり組
勝負と決まると件の棒を投すて馬と打寄真柄
と引組上へ下つと捻合る遂に兩馬の間一組で
落け多に真柄ハ老て力衰一本多ハ壮く氣盛んあ
ま忽に組敷押つて首と搔たりけ
木多忠勝姉川よて義景が軍を破りてハ勿論
あまもと真柄を撃して異聞とらりて諸書
の載る所旬坂式部兄弟よて式部ハ真柄に曹
の吹返しより綿齒まで切き五郎次郎は刀と鉏
元より切折き山田宗六は二つに切さくれ
六郎五郎鎌槍よて真柄を掛倒し式部小首取

汝をやく首と取て高名にせよと答ふ因て六郎
五郎真柄が首と討しつゝ然まゝと姉川の土
人ハ本多忠勝に討まゝと傳ふ益忠勝姉川の
先陣たゝと以く匂坂の功も忠勝の所爲の如く

真柄撃まし後越前勢敗走し蜘蛛の子と散けし如
く逃走せし小笠原與八郎の手の渡邊金太夫門奈
左近右衛門吉原又兵衛林平六中山是非之助以下
姉川と越つゝくまぐと追掛たり朝倉勢田川
虎御前の邊を討しつゝその數とらば真柄

り嫡子十郎三郎直基父討まじときくや否馬と返し四
尺三寸の太刀と振つゝ多くの敵を切らり
父が討まじ戰場に行向ひ見まじあし骸のこ
野徑の草に打ふたり十郎三郎涙と共に父が骸
と例の大太刀と郎等に取持せ本國へ返し遣り頓
て馬よ打のり敵陣一駈むりの能武者多くうち取
その身も重手数箇處負たまは今ハ是あてとて父
が討死の地に行腹搔切て死たりげも越前勢一
萬餘のその中よて勇士の名と揚尋常よ討死した
つと沙汰せらるゝは真柄父子よと止りけり十郎
左衛門尉が五尺三寸の太刀ハ今猶氣比の社に傳

大段言也多初

真柄十郎三郎直基を撃しハ青木所左衛門尉一
重あつと諸書に云り一重ハ加賀右衛門重直の
長男よてこゝろ一廿歳後太閤に仕一々黄母衣衆
廿四人のうちに撰まれまた七組の頭とあされ
民部少輔とつり

重修真書太閤記四編卷之二終

重修真書太閤記四編卷之三

磯野丹波守五段乃備と破事

并木下藤吉郎備と設て敵とまつ事

濱松勢と朝倉勢三田村表あく合戦數刻ありしに
朝倉方敗軍に及び田川虎御前の邊まで追詰られ
討死手負數しむに就中朝倉家よて柱石と頼
真柄十郎左衛門尉父子とけり黒坂備中守前波
新八郎同新太郎小林瑞周軒魚住次郎左衛門等歴
多く討死し大將朝倉孫三郎景健這この體にく
敗走をと聞えし野村小屯せし淺井備前守長

大段言也多初

政先陣を進りて合戦をばむ但淺井が先陣礮野
 丹波守ハ勇猛無雙の剛兵あまき其手に従ふその
 一人と一柔弱あまは形く誠似たりと友と勝
 りに勝り兵士一千餘人その外高宮三河守大野
 木大和守山崎源太左衛門尉等いづきも武勇の名
 と得しその共うれよ加り惣勢五千餘騎にて駈
 たりけり礮野ハ軍に馴れ剛の者ありけり織
 田方の段々に備えしと見く味方又向ひ此敵を破
 るにハ唯一筋小輪寶の山を崩し勢を以て突破
 少と我眞先又進んで突崩し御邊等左右
 と顧みば我に從て正面を切破り信長乃旗本まで

押詰勝負と一舉に決まるとや渡し礮野丹波守
 りづらら鎗を取て眞先に進み礮の兵士を左右
 に備え下知小因て放つべしと約束し騎馬乃兵士
 とは眞先小列ね織田方の先陣坂井右近將監が
 手に馳向ふ坂井が兵士鎗を取て突つて礮野が
 手乃者も同く鎗を合せ突合ふ時丹波守下知
 て礮を打つけりか坂井が手の兵士等驚きあ
 りて左右小を散亂し丹波守も軍ハ唯今
 ありと持たる槍を取直し面もあがり突掛ま坂
 井右近ころ口惜と兵士を勵まし踏止り戦んとお
 こども敵ハ大勢ありて目よあがり味方ハ小勢

あゝ然も鐵炮に打ちこりられ備へてきて色り
 きたる右近が手あて坂井喜八郎可兒彦右衛門以
 下百餘人討きて敗走まれば織田方の二番備池田
 勝三郎信輝二千餘人々々押かへて坂井にのり
 て戦と挑む礮野ハ初の軍に切勝て勢ゆるく破竹
 の如く猛威とあつたすこもたつらる池田が
 勢の真中一切く入鯨波と舉て突立まれば池田が手
 のこの弱きとりのあつたあらねるも一陣破まゝ跡
 といい大勢の死との狂に當りたたく隊伍とま
 て見えしは礮野まもく力と得て獅子の怒とば
 げませば池田が兵士辟易し右往左往と敗きたる

三番備の蜂屋兵庫頭頼隆二十餘人関と作りと池
 田に替る礮野ハ一陣二陣と切崩し此勢小織田殿
 の旗木一切入て死や死と下知りり息をも繼せ
 ず蜂屋に向ふ蜂屋が手の者荒手ふれども坂井池
 田の切崩さるを見て心にあらく怖たりけん鎗
 と合さる追もあく只一とくに追散りる四番備ハ
 佐久間右衛門尉信盛蜂屋に替らんと備と立る處
 へちや丹波守突掛り雷電あとの落りる様小巖敷
 攻付とまバ只今突崩されたる蜂屋が兵士のあど
 きのくも自由と得ば佐久間信盛心ハ矢猛又ち進むも

どと味方の勢の崩れかゝる混らうきれ同士討一
くハ耻辱をのめぬに似たりと見合すうち
に礮野の鎗先もどくわらゝ當そがけき佐
又間が勢左右一開ひて戦ふ及びこきは木下
が進り奉り軍法よく敵の強きをあぢちよ打
止んとせば味方の死亡多かべ左様の時ハ次
小ゆぐり中と開いて敵を通せと定めらるゝ故
あゝ奥儀とくや抑佐又間一戦も及び引退し
うば五番と備へ森三左衛門尉可成のりどよ味
方乃敗らうとゆふは如何あゝそのぞと心よあ

やゝ然とく爰を通をべきやとおよ切二十餘
人と真丸と備へ一と駈向へ礮野ハ士卒と下知し
て中けるハ織田家の備四段まで敗りたりこの備
だよ切崩せば信長の旗本あり日頃の遺恨をら
すハ只今ぞ各とと墓所とわらゝ我ハ續け後
ろあゝ大音聲と呼ぶあが我身の持と鎗と
見ると是れ多く戦ひと穂先と突折しかバ取
て投て四尺あまりの大太刀とありかさし森が
備と切て入る礮野に續く人ハ高宮三河守大野
木大和守山崎源左衛門尉とけりりて五十餘
人面もあらびおろき叫んて打てり火花を散り

大野記の編巻三

四

勢ひよ森が備もよてあまし既に破らる一う見え
 けりにも信長うとと御覽ありて三左衛門尉が
 備危し旗本と崩して可成と援けよやと下知し
 りしと木下藤吉郎承けいやく御旗本を以て軍
 とあしあふに及びゆえに秀吉かくてゆうちハ御
 心安かりと諫てのち木下手勢三千餘人と三
 手に分二千餘人と左右二備とありてうれは鐵
 炮とよとせ千餘人とに秀吉の側小置とすと怖と
 と備まげらふありし休もよてありそのち森が備
 一使と立と合戦今ハ程く御休息あれくと
 中送らば可成も礪野が五千餘人と揉合て氣つら

力屈し折少あまを實をよやおといけん
 操る人敷を纏て左右一開けば礪野も元より
 信長の木陣一とおといしとゆ森が勢を目を
 かけむ真一文字と旗本とと駈たりけり
 一書に坂井右近敗走せ後池田信輝木下秀吉
 入替り戦少とつてと浅井が二陣浅井玄蕃同
 雅樂助同齋宮助同木工助上坂備中守以下その
 次は三陣阿閉淡路守四陣新庄駿河守五陣東野
 左馬助六陣浅見對馬守七陣長政少と惣軍八千
 餘人猛虎奮獅の勢をよつと競ひ來るにう池
 田木下柴田明智の十餘隊あつてぐく切立ちし

濱松乃御勢を以て淺井が跡と取切ありしに
信長終に勝利を得しと云

木下藤吉郎礮野丹波守を敗る事

并淺井長政二たび合戦の事

木下藤吉郎秀吉ハ淺井の先鋒礮野丹波守ニ味方
を多く破らぬ信長の旗本もぞに危ふく見えしに
ハ爰ぞ木下ハ大事の所と備して待りける所
礮野ハあはれく勝なりと森ハ備を突崩し
長乃旗本御さんあきと大ニ勇進む所一木下藤
吉郎千餘人をあづらり列ねく待を見つ大ニ朝
夕笑ひ直に懸破らんとせしが待あづり合點り

ぬ軍立ちふ信長本陣乃先手りやど小勢も然も
備四度路あり如何あり計策とやありつらん殊に
此手ハ織田家の猿冠者あり楚忽又軍して猿智恵
にわくいきらるゝ丹波守心の中小疑を起し
猶豫ありたりけりや木下が得たる處の
軍略あれ秀吉礮野ハ左右あくらぬと見え
我備立と察して大將疑を起し見一たり此方
急又打掛り只一搦まを破る一續けや者
共と下知し秀吉真先に駈けよ礮野丹波守
つゝ驚き危ふく引る軍もつゝ
持て開く戦あつゝ實も軍ハ大將の心小ほる

あれハ礮野ガ心中の疑心諸軍に於て今まど凛々
たる勇氣あまのれたゆゑ自然と跡とつら
様にあうしかば僅ある木下ガ勢小攻立られ礮野
備大ニ色めき立バ木下これと見く時分ハ
と左右の備に下知とあし鐵炮と打りけさせ蜂須
賀小六同又十郎稲田大炊中村孫平二ハ左より木
下小市郎加藤虎之助福島市松片桐助作堀尾茂助
ハ右より二千餘人と鶴翼に開いて蟻の如く群
立ち浅井方八千餘人の中一面もあらば切入た
り礮野ガ軍勢この鐵炮と打りたまされ三百餘人
くらりと倒さしハ手負ハその數といらむ蜂須

賀小六同又十郎木下小市郎加藤虎之助鎗先とそ
ろへて突立まバ山崎大野木高宮以下一支も支え
ば四度路をどろと引退く礮野丹波守うきを見て
云甲斐あま人の振舞ふ敵も敵にこそされ美
濃尾張の侍多き其中猿とつゝ木下ぞや少
一の謀ハ有らりと何れどの事々あらん左乃と怖
るここのハ我又續けや人こと呼ばうあら木下
勢に打くつゝ木下得らりと鉄炮と放りけ三方
より礮野と中又打圍んで突立まハさしに剛き
丹波守もあいらいりの且ち今朝より數度の戦
氣疲ま力屈し馬を大にらば無念の齒と

大月己巳編卷三

齒おぐら後陣の味方に譲りて引てゆく木下が兵
士ども餘すまじく追掛け多に丹波守も取て
ハ返り取てハ返り浅井が本陣一か
浅井備前守長政ハ先鋒の礮野が織田の備と切崩
ト信長乃旗本一切掛と爰ぞ進む塩合
あり早總押は押掛と諸勢と下知して進む處へ
礮野大に追討き這旗本ゆ進來ま長政に
まを迎取さて信長乃旗本一責入んとする處へ木
下り三千餘人隊伍亂る整と押來ま長政の
手り赤尾美作守中條日向守一千五百餘人真先
にもむむその跡り長政乃旗本一千五百餘人遠

藤喜右衛門尉浅井半助早川右馬允等と首とく
百もあらは撃つ秀吉敵の氣と察くと兼く
妙と得たりハ是等と爰まく打留んとせば味
方も若干損をこし暫くその銳氣と避てその満
と討べしと思惟ハの鐵炮備に下知して二發三
發ありしや然三千餘人と二つに分中と開と通
しけるに浅井が勢ども早切勝とぞ續けや
續け向に備とハ信長の本陣お願ふ處の敵
あり一足も引ふ退とと敵と味方と勵まし真間
に駈けと信長ほか御覽ありて木下が勢を
でに破らまじと覺ゆ急き打出て是と援けと宣

大陣言ハ終末三

一ハ氏家入道ト全安藤伊賀守承りぬりも果
 ザ横合り浅井が先鋒一切かきハ浅井前後の
 二隊と一隊とありて戦ひと挑ひこの時礮野又駈
 破られ織田家乃池田佐久間坂井が輩も取て返
 一長政に切てかき森と蜂屋ハ長政の先鋒又向
 中條赤尾と氏家安藤火花と散りて戦たり敵ハ
 三隊に味方ハ二隊何も日頃親しき中あり
 ハ面と知て耻り退ふ退いと揉合り浅井
 殊又新手あり遠藤喜右衛門尉浅井半助二人ハ今
 日の軍に打負ハ生て二度面と合せし心底又誓
 しく出陣しつゝは撃とも切ぞと屑とせず命と限

りに戦あり坂井池田が勢切立られ色りきか
 ると見て坂井父子こハ口惜今朝ハ礮野小破ら
 しとあに只今ま切負あバ日比の軍功無
 ろのあら味方の耻辱に過は爰に謝
 死せりやと子と諫り父と勧めて長政の手一切
 入い浅井が勢も是と見知り我討取んとひし
 終又父子と左右に掛隔て責たりける坂井久藏
 今年十五歳力量ありて打もの達者なりハ多
 く敵と切伏く既又長政に近付んとせし處と早
 川右馬允きつと見て馬け寄久藏又馳向い見
 ハ實又小童ありその上容貌美麗あまは是程の小

人と情ありと猶豫ありけるその隙又久藏をんで
 打太刀と請損早川馬より切落され二つはあり
 て死したるけり長政の側の兵士等こまをとりて鐵
 炮を打りけりまにけり久藏馬の平頭玉二つ
 中よりかば馬はたまたま倒れしを久藏馬より落
 處敵大勢こゝ合て終にこれを撃つる久藏幼弱
 あがら父は劣らぬ能戦しけり戦死しける勇氣を喪
 ぬそのぞあさ久藏が郎等二人主と尋て走り來
 かくと見ゆる敵の中一駟入おしむるど戦しけり
 足を引けおろし枕に討死に坂井右近ハ淺井掃部
 黒井藤五郎淺井半助と戦ひ居たりけり久藏討

聞き聞て最惜や我子おら武勇といひ意とい
 ひ尋常又勝ましとのと先立て何の爲に軍とハ爲
 べきぞ我子の討ましその場は我も共討死し
 三途と一處小渡らんと進むと郎等とも轡にすが
 きて諫めけりハ御歎み御志ハ然しとあがり大將
 いちど安穩に在る小御命と棄てせらるる勿體ありし
 只御身とたすめて始終の勝負と御心と掛ありし
 勸めけりあが右近も理は折る馬と引返を淺井勢
 ハ勝利と得しと此機と脱ふ兵ごとと貝鐘と鳴し
 先鋒次鋒と一つにあし信長の本陣一切掛り遺恨
 とばらすハ是時ぞと逸りけりを見て池田佐久間

二と支えて戦へども浅井が兵士の勢猛く中よ
も遠藤喜右衛門尉浅井半助と闘ふて多く敵と
撃けきハ長政より力を得急し押掛る處一礮野
丹波守敗軍を集りて二千餘人小山の動くを馳
來り長政の手に加ふれハ浅井が軍兵龍の雲に乗
し虎の風と起せし思をあり勇氣鋭く進み木下
井礮野ハ元信長の本陣一切入んと期し
バ木下ハ目と掛る浅井礮野が勢半に過て打通
りしと見すまし木下三千餘人と一團とあり長政
の旗本の後一あけりと鐵炮と打せ秀吉自身太鼓

と撃て兵士を進めけきハ浅井が後陣小從あさ
礮野丹波守木下小向あて突てけり木下勢を二つ
に引分一手ハ礮野と戦へ一手ハ浅井が後と
責させ鐵炮と打かけく透と伺ふ軍とせん
木下離合自在器水の陣法を得しとりハ此戦
を以て知へしとあり

重修真書太閤記四編卷之三 終

大開言の終卷三

